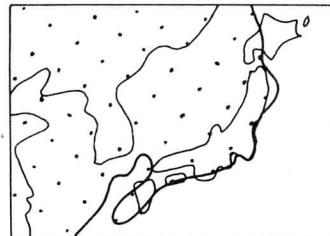


セラム、トリゴニアなどが見つかっており、昭和43年には6.5mほどの大きな、くびなが竜の化石が、いわき市大久町入間沢で発見されています。

また、日本列島では、白亜紀の終りから第三紀にかけて、大規模な花こう岩の貫入や、大量の火山岩の噴出がおこりました。この一環として福島県内でも阿武隈山地に2回にわたって花こう岩が貫入しました。現在、阿武隈山地で見られる花こう岩はこの貫入でできたものです。

4、常磐炭田の形成時代（古第三紀：6400万年～2600万年前）

中生代末の大規模な花こう岩の貫入をともなう造山運動で、海底にたい積した中生層も陸化しました。古第三紀始新世の終わりから漸新世にかけて、北茨城市からいわき市にいたる南北85kmにおよぶ地域で沈降が始まり、大きな湾形の入り江ができ上りました。当時の気候は高温多湿で、入り江の周辺の山地には、メタセコイヤをはじめとしてポプラ、プラタナスなどの温帯性樹木やシラカバ、バショウなどの亜熱帯性樹木が繁茂しており、これらの樹木が入り江に流れ込み、それを砂や泥が埋めて石炭層ができました。



古第三紀末の日本列島

漸新世のはじめ頃は、水深も浅く、レキ岩-砂岩-頁岩-石炭-頁岩の順に、小さなたい積輪回をくり返していることから、水深も一進一退を続けたことがわかります。

石炭層のたい積後、この付近はさらに沈降がすすみ、海が陸地に入りこみ、海もいっそう深くなり、砂質や泥質の厚い地層をつくりました。この砂質の地層にはたくさんの中生代の動物化石が含まれております。

一方、阿武隈山地以西の地域は、中生代はじめから続く日本の大陸時代であったために、古第三紀の地層はありません。

5、阿武隈山地が島となる（新第三紀：2600万年～200万年前）

新第三紀の中新生代の始めに、福島県だけでなく、東北地方全域に、さらに広く日